



Can-Doリストをどう作る

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 文部科学省の「5つの提言」

文部科学省より昨年出された、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」をご存じだろうか。そのうちの提言1に「生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する」とある。そして、具体的施策には次のように書かれている。

- 国は、諸外国の取組も参考にしながら、国として学習到達目標を「Can-Do リスト」の形で設定することに向けて検討を行う。
- 中・高等学校は、学習到達目標を「Can-Do リスト」の形で設定・公表するとともに、その達成状況を把握する。国や教育委員会は、各学校が学習到達目標を設定・活用する際に参考となる情報を提供するなど、必要な支援を行う。

これらは、中・高等学校に対してなされた提言であるが、現状では中学の英語教育との相性の方がいいと言えるだろう(理由は後述する)。

2. Can-Do リストとは何か

「英語で何ができるか」を記述したものを Can-Do ディスクリプタと呼んだり、Can-Do ステイトメントと呼んだりする。このリストが「Can-Do リスト」である。私たちは、英語の授業では英語の単語を教えたり文法を教えたりしているが、最終的にはこれらの知識を使って、生徒には英語で何かをできるようにしてほしいと考えているはずだ。

中学の教科書では、オーセンティシティの比較的高いタスクが設定され、授業ではこれらのタスクが行われることが多い。様々な言語材料は、これらの

タスクの遂行のために用いられており、このイメージは中学のほとんどの教師に共有されているだろう。これが(現状の)中学の英語教育の実態と Can-Do リストの相性がいいと考える理由である。

とはいえ、日々の授業に追われていると、教科書を教えることに汲汲として、「教科書を教えることで最終的にどのような生徒を育てたいのか」ということを忘れがちである。よく「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」のだと言われるが、Can-Do リストの開発では、まさに「教科書で教える」で「生徒が何をできるようにするのか」が問われているのだ。

3. Can-Do リストをどう作るか

Can-Do ディスクリプタは、「英語で何ができるかを記述したもの」であるから、まず教師が自身の英語使用経験を振り返ることが重要である。「書くこと」であれば、誰に向けてどんな要件でどんなタイプの文章を書いたことがあるかを振り返るのである。たとえば、「そういえば、先日うちのALTに、授業の打ち合わせのためのミーティングの日時を知らせるメールを送ったなあ」というような具合である。Can-Do のもともとの発想は、実際の言語使用から来ているから、「教科書の本文を読んだ」というようなものではダメである。本来の目的が英語学習ではなく、何かの目的のために英語を使うとらなければならない。同じ何かを読むのでも、「何かの器械の使い方がわからないから、その器械を使うために取扱説明書を読んだ」とか、「上映中の映画のうちどれを見るかを決めるために、映画の宣伝文句やあらすじを読み比べた」とらなければならない。

こうした作業を行う際に、ネックとなるのは、意

外と教師の英語使用経験が限られていることだ。これまでワークショップをやった感じでは、ALTとのつきあいや海外研修などの経験があることから、「口頭のやりとり (spoken interaction)」はいくつも思いつくが、「口頭発表 (spoken production)」や「書くこと」となると思いつく経験はそう多くない。せっかく身に付けた英語の知識だ。自分でいろいろ経験することで、生徒の目標設定にも役に立ててほしい。

こう書くと、なんだかとてもレベルの高い話で、中学生とは縁もゆかりもないような気がしてくるが、そうでもない。中学生であっても、ファストフードのメニューや簡単なポスターであれば、大半は理解できるし、名前・出身・趣味程度の内容を含んだ自己紹介であればできるはずである。

このような Can-Do リストを、中学3年終了時をイメージして、まず作ってみてはどうだろうか。これを作成することは、目の前の生徒をどのような英語学習者・使用者にして、中学から送り出すのかと考えることになる。それがイメージできたら、今度はどのような道筋を通してそこに行き着くかを考える。おそらく現実的なのは、次に2年終了時・1年終了時での到達点をイメージすることだろう。

4. CEFR と CEFR-J

Can-Do リストを含む代表的な枠組みで、近年注目されているものに、Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) がある。ここでは、初学者のレベルからたくさんの Can-Do ディスクリプタが提供されているので参考にしてほしい。また、この CEFR を日本の英語教育に適用した CEFR-J も参考になるだろう。CEFR-J は、現在 Version 1 が Web で公開されている (<http://cefr-j.org>)。CEFR-J の Can-Do ディスクリプタからいくつか紹介する。

「聞くこと」A1.3：(買い物や外食などで) 簡単な用をたすのに必要な指示や説明を、ゆっくりはっきりと話されれば、理解することができる。
「読むこと」A1.3：簡単な語を用いて書かれた、挿絵のある短い物語を理解することができる。

「話すこと (やりとり)」A1.3：趣味、部活動などのなじみのあるトピックに関して、はっきりと話されれば、簡単な質疑応答をすることができる。

「話すこと (発表)」A1.3：前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、複数の文で意見を言うことができる。

「書くこと」A1.3：自分の経験について、辞書を用いて、短い文章を書くことができる。

5. Can-Do リストを作ったら

仮にこのリストが中学卒業時の到達目標だとしてみよう。これらは単なる文言なので、「聞くこと」の「指示や説明」や、「読むこと」の「挿絵のある短い物語」は具体的にどのようなものかを探して決めたり、「話すこと」であれば「生徒のパフォーマンスの実例」、 「書くこと」であれば「文章の実例」などを用意できるとよい。これらはベンチマークと呼ばれるものだ。

Can-Do ディスクリプタが、実際に到達できたかを知るには、教師による観察や生徒による自己評価、または、テストなどを行うことになる。指導と評価の一体化ということから言えば、教師や生徒はこれらのことをある程度自信を持って評価できるようになっていなくてはいけない。この際注意しなければならないのは、Can-Do ディスクリプタは、学習者が自力でできることを書いたものなので、教室の中で教師や友達などの様々な助けを得てできてしまうようなことは「できる」とは判断されない。

ただ、いざテストを作ってみると、Can-Do ディスクリプタは解釈の幅がかなりある場合もあり、教師間のタスクイメージが異なることがあるので、注意が必要である。

到達目標が確定したら、それらが教科書を用いた現状の指導で達成できるか、つまり、日々の授業の積み重ねが、ひとつひとつの目標をどう達成するかを考えるのである。また、中学卒業近くなったら、生徒がこれらの目標をどのくらい到達したかを確認することになる。こうしたことの振り返りが Can-Do リスト作りでは大切であり、意義がある。